

# 特集

## 「星繁き天空」の展開としての崇高感情

### ～「栄光の山」への転換と近代における恐怖感情の「克服」～

中村美智太郎（静岡大学）

#### 1. はじめに

星や天体を対象とする私たちの認識は、どのように扱われてきたのだろうか。文字を使用するようになる以前から人類は、天体の観察を通じて人が生きる時間の基準を定めていたと一般に考えられる。このことは、手や足の感覚など触覚の届かない距離にある自然を、視覚によって認識することで、この世界を把握しようとしてつとめてきたことを意味するだろう。植物や岩石、水といった、触覚を通じても把握できる自然とは異なり、専ら視覚を通じて、あるいは想像力を拡張して把握する自然であるという点で、特異な把握の仕方であると言えよう。

触覚によって把握する地上の自然の中には、嵐や崖のように、恐怖を与える自然も含まれる。その典型的な例は、ヨーロッパにおけるアルプスのような山岳である。そして、このような恐怖を与える山の存在は、人間が支配することがいまだできない自然対象であり、恐怖感情を克服することとは概ね、そうした理性の力によって自然の支配から逃れ、逆に人間が支配することを意味した。これに対して、宇宙や天体は、恐怖を与える自然とは区別される。それらはむしろ、人間の手が届かない無限の存在として重要な役割を果たし、しばしば崇拜や畏敬の対象にもされてきた。

こうした自然について、私たちはどのように捉えてきたのか、そしてそのことが私たちの生に与えるインパクトをどのように捉えればよいのだろうか。

本稿では、こうした問題意識に基づいて、2024年3月3日に浜松科学館で行った「近代における自然と崇高：『栄光の山』への転換

としての神性への道行き」と題した招待講演の内容にも触れつつ、講演では議論の俎上に載せられなかった論点を含めて、天体を含む自然に対する人間の関わり方とその克服をめぐる諸問題について、考察する。

#### 2. 「星繁き天空」と「道徳法則」の関係

さて、こうした人間と自然との関係について考えるとき、18世紀に活躍した哲学者イマヌエル・カントの思想が想起される。カントは、『実践理性批判』（1788年）のほぼ最後にあたる箇所ですべてのように述べている（傍点原著）。

二つの事物があつて、それについてわれわれの考察が一層しばしば、一層継続的に没頭してゆけばゆくほど、いよいよ新たな、そして増大してゆく感歎と畏敬の念をもって心を満たすのである。すなわち、わが頭上なる星繁き天空とわが内なる道徳的法則である。（カント：1788=1965, 289=368）

カントによれば、人間が感性によって認識する星空は、その感性の範囲を人間自身が拡張していくことで、「諸世界の彼方にある諸世界」「測りしれない全体」へと、さらには「無際限な時間」へと至ることができる。「星繁き天空」と「道徳法則」とを併置することによって、カントはここで無限の自然に匹敵する無限性を人間が持ち得ることを示しているように思える。

この前提となるカントの立場は、しばしば「コペルニクスの転回」という表現によって説明される。この表現は、「宇宙の中心は地球

だ」とする従来の学説に対して「宇宙の中心は太陽だ」と主張したコペルニクスのように、カントが『純粹理性批判』において従来の学説とは異なる見方を主張したことを指している。日常的には、まず対象があつて、認識がそれに従うと理解される。しかし、この見方を逆転させて、対象が私たちの認識に従わなければならない、とカントは考えた。例えば、「桜の木」がすでにあつて、人間がその「桜の木」という対象のイメージに従ってそれを受け取るという形式が従来の、あるいは日常적인見方だが、この図式を転回させて、カントは、人間が「桜の木」として認識することで初めて、その物が「桜の木」という現象として成立する、と考えた。人間の認識能力がなければ、桜の木は桜の木としてあることはできない。ここでいわば人間は「桜の木」というレッテルを貼り付けている（対象が認識に従っている）わけだが、他方カントは、そのレッテルの向こう側にあるものは「物自体」であつて、それが何かは観念のみで捉えられるだけであつて認識の対象外であるために、それを認識することはできない、と考える。すなわち、ここでは、人間の認識能力には限界があること、そしてその限界の範囲内においてのみ認識と現象は成立することが示されている。

このように、コペルニクス的転回は、主観と客観が逆転していることが特徴となっており（例えば石川：1996）、この立場は、先述の引用においても前提となるものである。人間の認識能力には限界があるものの、対象を認識に従わせ、道徳法則を立法する能力をもつ存在でもある人間は、「星繁き天空」にも匹敵する存在でもある。カントにおける道徳法則は、誰かに強制されずに自ら立法するものであり、他のいかなる動物もそうした能力を持たないという意味でも、人間を特別な存在へと押し上げることになる。

### 3. 「暗い山」から「栄光の山」への転換

カントが考えるように対象が認識に従うという図式が成り立つとすれば、その先に人間が「自然」を克服する可能性を見出すことは無理がないようにも思える。近代以降の歴史を、人間が自然を克服するプロセスとみなす見方はそうした態度を反映していると言えるだろう。今日に至るまで、その負の側面として、そうした「克服」によっていわゆる環境問題が引き起こされたと批判されることも、しばしばある。実際、人間に恐怖を与えてきた自然は、技術開発への努力や文明の利器によって漸次的に克服されつつあった。例えば、アルプス山脈を越えることもそのひとつである。多くのヨーロッパ人にとってアルプス越えは、命を賭けた旅であった時代が長く続いた。しかし、近代以降、イギリス貴族の間でグランドツアーが流行するようになる頃には、宿泊施設やインフラがある程度整備され、そうした自然の克服の結果として、比較的安全な旅行だったと考えられる。貴族の子弟が教育の総仕上げとして行ったアルプス越えを含むグランドツアーは、もはや命懸けの旅としては行われなかったのである。

しかし交通網が整う以前は、文字通り「恐怖を与える自然」であり、マジョリー・ホープ・ニコルソンが人間に「最後の審判を下す神の怒り」を感じさせたともみなしたように「地獄の試練」とも評されるようなものだった（Nicolson：1997）。であるがゆえに、その克服を成し遂げた者は英雄となった。例えば、カルタゴの名将とも称されるハンニバル・バルカは、紀元前218年に自ら軍隊を率いてアルプス越えを成し遂げ、イタリア半島へと進軍するという戦術を採用・実行したことをきっかけとして、後の時代に英雄視されることになったことはよく知られている。

このように、命の危険を伴う過酷なアルプス越えの旅のイメージは、その難所を越えた

人物の象徴的なイメージを作り出すことにもなる。典型的な例として、19世紀にジャック＝ルイ・ダヴィッドが描いた『サン＝ベルナル峠を越えるボナパルト』を挙げることができる。この絵画には、馬に乗るナポレオンの肖像画の背景に、このアルプス山脈の峠が描かれており、こうした「恐怖を与える自然」を背景に置くことで、それを実際にナポレオンが克服したかどうかは別として、ナポレオンのイメージにおける権力性や英雄性を補強する役割を果たしている。

こうして文明・文化の発達をもたらした人間自身の力によって、「恐怖を与える自然」は徐々に克服され、すでに言及した通り、グランドツアーの流行を導くことになった。しかしこのことは、単に旅行の流行ということだけを意味するのではない。先のニコルソンは、恐怖を与える自然を、理性の光が届かない「暗い山」と表現しており、まさにこうした「暗い山」から、人間の力、理性の光が届く「栄光の山」への転換を進めたのが近代という時代だったと特徴付けている。こうした特徴付けは、この時代の思潮についての全体的な特徴を的確に言い当てているように思われる。

この転換の背景に目を向けると、ルネサンスや宗教改革の影響を受けた教育の普及と、それに起因する社会の変化が大きく影響したと言えるだろう。「最後の審判を下す神の怒り」のような感覚を支えていたもののひとつは、巨大な権力を持っていたキリスト教の教会組織の権威だったわけだが、一般に、宗教改革などを経てその権威性は相対的に低下していくことになったと考えられる。このことと表裏の関係にある出来事として、神ないし教会に依存せずに、人間自身の観察や考察によって世界を説明しようとするいくつかの試みが生まれ、それらの試みがいわゆる「自然科学」の誕生を促進することになった。コペルニクスやケプラー、ニュートンらの研究がその最

たるものだが、そうした自然科学が大きく影響し、社会における人間の知的能力への信頼がいつそう高まり、それ以前から整えられてきた教育システムの構築とその普及も、そうした知的能力を十分にそなえた人々の増加を助けた。特にドイツの大学においては、宗教改革期に正教授職が確立され、大学特有の職階制に基づいて高等教育が行われるようになり、思想的にも制度的にも絶対主義国家が大学との関わりを密にしてく時代となっていく（別府：1998）。国家が高等教育を支えるという側面が強化されることで、知性の質的変化もまた準備されることになったのである。

こうして宗教的権威に依存しない傾向が加速し、神から与えられた統治権に基づくのではなく、合理的な個人や組織同士が自律的な意思に基づく契約を重視して共同体や国家を運営していく時代が到来すると、国家と教育とが関係を深めていくという事態も別の意味を強め始める。すなわち、そうした自律的な個人を涵養することが相対的に重視されるようになったということ、そしてまた、そのような個人同士が社会を協働的に営んでいくことが期待されていったということである。

もちろん、だからといってこのことは宗教的な側面がただちに排除されることを意味するわけではない。実際、大学においても神学部は尊重され続けたし、社会における宗教の機能は失われることはなかった。ただ他方で、自律性を備えた個人と、そうした個人が営む共同体の役割が拡張していったことは間違いないだろう。「暗い山」から「栄光の山」への転換は、このような大きな時代の動きとともに行われてきたと考えることができる。

#### 4. 教養市民における新しい公共性

近代における、この「暗い山」から「栄光の山」への転換には、もうひとつ重要な側面があると考えられる。それは、市民をめぐる

状況の変化である。すでにみたように、アルプス越えを成し遂げた者は、ハンニバルのように「英雄」とされてきた。だが、「恐怖を与える自然」が克服されつつある時代においては、同時に、新たに教養市民層が誕生していく状況が生まれた。このことは、英雄化される個人が消滅することを意味するわけではもちろんない。実際、良くも悪くも英雄は現代に至るまでに途切れることなく出現し、歴史や文学の中にその名を刻んでいる。今日でも、「カリスマ」と形容されるような人物は、分野を問わず数多存在している。

その一方で、決してそのような英雄として崇められるわけではない存在の「市民」が台頭してきた。そうした市民は、「第三身分」と呼ばれる、国会・議会とも国王・王権とも区別された存在であった。ユルゲン・ハーバマスは、この第三身分について、公権力に対して「既存の支配の原理を掘り崩そうとする」ものであり、支配それ自体の変化を求める「監査の原理」としての「公開性」を重視する存在だと分析している（Habermas : 1990）。この第三身分は、支配層ではなく、必ずしも政治的な存在でもない。自らの財産を自由に処理することができ、この経済性を土台としているために、支配層になることや支配権を要求するのではなく、あくまでも支配原理の掘り崩しを要求するのであって、この点で例えば領主のような身分とは区別される。だからこそ、こうした第三身分は、「公権力の公共性の傘の下で非政治的な形態の公共性」という独特の公共性を形成することになるのであり、ハーバマスはこれを「文芸的公共性」と名付けている。

ハーバマスが的確に指摘しているように、この文芸的公共性は、公共の議論のいわば練習の場所としての機能をもち、その意味で第三身分にとっては「自己啓蒙」の機会を提供するものだった。具体的には、喫茶店、読書

クラブ、サロンといった形態をとり、そうした空間を利用して、第三身分の中で新しく教養市民層は形成されていくことになった。

そして、18世紀の終わり頃、こうした公共性に期待を寄せた人物のひとりが、フリードリヒ・シラーであった。シラーは、しばしばゲーテと並び称され、劇作家として活躍した人物である。他方、カント研究を通じて、1790年代初頭から約10年の間に執筆された一連の哲学・倫理学・美学的な諸論考を通じて独特の思想を形成した人物でもあった。その思想のひとつに「美的国家」思想が挙げられる。この美的国家は、ハーバマスが文芸的公共性と呼んだものと響き合う概念であり、シラーはその文芸的公共性の具体的な役割イメージを提供していると考えられる。そこで、次にシラーの美的国家思想について、恐怖感情の扱いに注目して考察してみよう。

## 5. 恐怖感情はいかにして「克服」されるか

シラーは、1795年の『人間の美的教育についての一連の書簡』（以下『美的教育書簡』）における最後の書簡である第27書簡の中で次のように「美的国家」を規定している。

法という力学的な国家では、人間は力として人間と出会い、自分の働きを制限し、義務という倫理的な国家では、人間は法則の威厳によって人間と対立し、自らの意志を束縛するとすれば、美しい社交のサークルにおいて、すなわち美的国家において、人間は人間に対して形態としてのみ現象し、すなわち自由な遊戯の対象としてのみ対立すべきである。自由を通じて自由を与えることがこの領域の根本法則である。

(Shiller : 1795=2004)

シラーはここで、美的国家を「美しい社交のサークル」と規定している。このことは、

シラーにおけるこの概念が、政治的な制度としての国家ではなく、それほど多くない人数の集団をイメージしたものであることを示唆している。こうした集団での活動としての「趣味」を通じて、教養市民層の個々人の内側に「調和」が生み出され、そしてそれが社会においてより大きな範囲の調和として実現されることを、シラーは期待している。ここで重要なことは、「調和」という表現が象徴的に示され、かつ強調されているように、自らの内外で発見される対立における「分断」を乗り越える枠組みとして、美的国家が措定されているということである。美的国家は、このように調和的な個人が集まって形成されるものとされるが、ここでの「調和」は、どのように実現されるのだろうか。

この問題については、『美的教育書簡』とほぼ同時期に著された『崇高について』(1801年)における崇高感情の議論の中にそのヒントが残されている。ここでは、『美的教育書簡』引用箇所においても重視されていた「自由を通じて自由を与えること」が再び登場し、人間の内に調和をもたらすこと、さらにはその調和が持つ意義が考察されている。

しかし、自然の諸力の盲目的な殺到に対して、自由な観察が人間に余裕を与え、またこの現象の洪水のなかに自分自身の本質のなかの持続的なものを発見するやいなや、人間の周囲の粗野な自然の集まりは全く違った言葉を人間に語り始める。そして、人間の相対的な偉大さは人間自身の内部の絶対的な偉大さを移す鏡となる。恐れることもなく戦慄を与える快を抱いて、人間は今やその構想力のこの恐ろしい形象に近づき、この構想力の全能力を意識的に注いで、感性的に無限なものを表現しようとする。

(Shiller : 1801=2004)

人間が自由であることは、自然の「盲目的な殺到」、すなわち恐怖を与える自然に対抗する原理となる。シラーはこの論考で、人間の恐怖感情に言及して、恐怖感情に対して理性的自律性が対置されたとき、「混合感情」が生まれるとの分析を展開する。恐怖を与える自然をどう克服するかがまさに主題化されているわけだが、ここでの克服は、恐怖感情の解消・消滅を即座に意味しないことには注意が必要である。理性的自律性における自由の働きによって恐怖感情は、「恐れることもなく戦慄を与える快を抱いて」とあるように、ついに快へと転換されるに至るが、「戦慄を与える快」そのものは保持されている。混合感情はこの状態に至って、崇高感情と呼ばれるようになる。

実はこの崇高感情には、感性的世界から理性的世界への移行をもたらすという機能がある。すなわち、恐怖感情の衝撃によって感性的世界の出口が開かれ、理性的世界への移行の可能性が生まれるのである。シラーの議論においてはこうして、近代的な人間にとってこの崇高感情の働きを手に入れることで、「栄光の山」への道が開かれていくことになる。

## 6. おわりに

ここまで見てきた通り、シラーにおいては、自由であることを通じて、人間を美的国家という集団として高貴化しようとする発想がみられる。この高貴化のプロセスにおいて、恐怖を与える自然に対抗する原理を自らの内に発見することは、「人間自身の内部の絶対的な偉大さを移す鏡」を発見することを意味している。このように論じるシラーは、ここで明らかにカントのあの「わが頭上なる星繁き天空とわが内なる道徳的法則」という考察を踏まえており、そしておそらくそれを更新しようとしている。すなわち、カントにとっては、「星繁き天空」と「道徳法則」を自己立法で

きる人間とは等価なものとして位置付けられていたのに対して、シラーはその位置付けを美的国家の枠組みにおいて捉え直し、「調和的な社会」の実現に向けて拡張されることを期待しているように思われる。

そうした期待が、カントの「星繁き天空」のイメージのシラー独自の展開とともに、語られる。シラーにおける美的国家の形成は、「高貴化」への道行きを歩むサークルをいかに実現していくかという問題意識とともにある。このように、シラーにおいては、神や宗教的な文脈に依存せずに、むしろ「美的国家」や「高貴化」という概念が示唆する通り、教養市民層が果たす現実的な役割に一定の期待を寄せていることが見て取れるのである。

## 文 献

- [1] イマヌエル・カント (1788=1965) 「実践理性批判」(深作守文 訳), 『カント全集』第7巻, 理想社, pp.129-371. 引用に際してはアカデミー版A版の頁数と深作訳の頁数をこの順で併記する。
- [2] Nicolson, Marjorie Hope (1997) 'Mountain gloom and mountain glory; the development of the aesthetics of the infinite', Seattle and London: University of Washington Press, pp.1-403.

- [3] 石川文康 (1996) 『カント第三の思考: 法廷モデルと無限判断』, 名古屋大学出版会, pp.1-314.
- [4] 別府昭郎 (1997) 『ドイツにおける大学教授の誕生』, 創文社, pp.1-336.
- [5] Habermas, Jürgen (1990) 'Strukturwandel der Öffentlichkeit: Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft', Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, S.1-391.
- [6] Schiller, Friedrich (1795=2004) 'Über die ästhetische Erziehung des Menschen in einer Reihe von Briefen', in: Sämtliche Werke, Bd.5., München: Carl Hanser, S.570-669.
- [7] Schiller, Friedrich (1801=2004) 'Über das Erhabene', in: Sämtliche Werke, Bd.5., München: Carl Hanser, S.792-808.



中村 美智太郎

\* \* \* \* \*